

# 観智院本『世俗諺文』の漢字音（付・字音点分韻表）

石山 裕慈

0 はじめに

源為憲により撰述された『世俗諺文』は、当時通行していた俗諺とその典故を集成した文献として、夙に知られている。観智院本は『世俗諺文』唯一の古写本であり、一三世紀中頃に僧侶により書写されたと考えられること、また訓法は漢籍訓読の特徴を失っており、仏家読みを多く交えていることなどが指摘されている<sup>(1)</sup>。また、西崎亨（一九七二）による索引も公開されており、研究環境も整備されている。

しかし、その一方で、多くの仮名音注・声点に加えられているにも関わらず、漢字音に関してのまとまった論考は、高松政雄（一九七八）が主に呉音語の声点について研究を行っている程度であるという現状がある。世俗諺文全体の漢字音の傾向については、まだ十分な考察が行われていないことから、本稿は『世俗諺文』の漢字音について概観するとともに、

字音点の分韻表を作成し、漢字音研究の便宜に供することを試みるものである。

## 1 漢音・呉音の分布

本資料の出典には外典関係の文献が多数を占めており、従ってここに現れる漢字音も日本漢音の体系に沿ったものが多<sup>(2)</sup>い。その詳細は後述するところであるが、一方で音形や前後の文脈などから呉音語と思われるものも多く混じっている<sup>(3)</sup>ので、最初に世俗諺文に現れている呉音系字音について概観しておきたい。

呉音語と判断されるものとして、出現順に以下の用例がある<sup>(4)</sup>。

優ウ曇ト華カ 72—4、一遇ウ 72—4、厨子ウ 78—4、雌黄ウ  
80—7、積ウ 81—5、法華文ウ 句ウ 83—7、王ウ

83 | 9、智チ光クワウ 84 | 4、精セイ勤キン 84 | 5、修シュ  
 習シツ 84 | 5、寂シツ 84 | 8、阿ア含カン 85 | 8、修シュ  
 | 1、ヒ革カク十シウ卑ヒ 85 | 1、大ダイ林リン 85  
 | 1、露ロ地ヂ 85 | 2、獼ミ猴コウ 85 | 2、蜜ミ  
 6、奉フ上シヤウ 85 | 6、獼ミ猴コウ 85 | 6、獼ミ猴コウ 85 |  
 7、歛セン喜キ 85 | 9、踊ヨウ 85 | 9、舞ブ廻クワイ  
 施シ 85 | 9、西シ域キキ記キ 86 | 2、吠ヘイ舍シヤ 86 | 2、城シヤウ  
 86 | 2、石シヤク桂キ 86 | 2、卒ソツ都ト婆ハ 86 | 2、獼ミ猴コウ 86 |  
 2、蜜ミ 86 | 3、卒ソツ都ト婆ハ 86 | 3、報ホウ恩オン 86 | 3、經キヤウ 86 |  
 | 6、久遠クワン 86 | 6、不フ可コ計ケ劫ケツ 86 | 6、坐サ  
 禪ゼン 86 | 9、默マク然ニヤム 86 | 9、隱イン寂シヤク 86 | 9、  
 住ジュ 87 | 1、肉ニク肥ヒ 87 | 2、食シヤク噉タン 87 |  
 6、仁ニ王ワウ 88 | 2、生シヤウ惜シヤク 88 | 4、食シヤク惜シヤク 88 |  
 | 5、利リ養ヤウ 88 | 5、礼レイ記キ 89 | 4、曲クワク礼レイ  
 90 | 4、古コ文ブン尚シヤウ書シヤウ 90 | 7、毛モウ詩シ 91 |  
 6、上シヤウ宮キヤウ太タイ子シ 91 | 8、莊シヤウ子シ 94 | 2、墨シヤク  
 子シ 95 | 6、礼レイ記キ 96 | 1、孔コウ子シ家カ語ゴ 97 |  
 1、周シウ易イ 98 | 2、運ウン命メイ論ロン 98 | 6、優ユウ曇タン  
 華カ 98 | 9、妙ミョウ法フ 99 | 1、文モン句ク 99 | 3、靈レイ瑞スイ  
 99 | 3、金キン輪リン王ワウ 99 | 4、三サン乘シヤウ 99 | 4、  
 調テウ熟ジュク 99 | 4、淮ワイ南ナン子シ 100 | 2、莊シヤウ子シ  
 106 | 9、六ロク韜トウ 107 | 9、曲クワク礼レイ 109 | 8、顏ケン氏シ  
 119 | 6、家ケ語ゴ 121 | 6、礼レイ記キ 124 | 1、礼レイ

記キ 124 | 8、山サン海カイ 130 | 6、礼レイ志シ 131 | 9、  
 賢ケン愚ユ 132 | 3、不フ可コ計ケ劫ケツ 132 | 3、四シ天テン  
 下カ 132 | 7、帝テイ釈シヤク 132 | 8、賢ケン愚ユ 132 | 3、四シ天テン  
 | 1、顏ケン氏シ 135 | 6、天テン皇ワウ 140 | 3、曲クワク礼レイ 143  
 | 4、周シウ易イ 143 | 9、詠エイ史シ 145 | 7、釈シヤク籤ケン 146  
 | 9、四シ分フン律リツ 147 | 7、世セ尊ソン 147 | 7、比ヒ  
 丘キウ 147 | 7、呪ジュ願ケン 147 | 7、長チヤウ壽シウ 147 | 7、居コ  
 士シ 147 | 8、礼レイ拜ハイ 147 | 8、比ヒ丘キウ 147 | 8、  
 長チヤウ壽シウ 147 | 8、緣エン 148 | 1、僧ソウ祇キ律リツ 148  
 | 3、禪ゼン坊フヤウ 148 | 3、涕テイ垂シ 148 | 5、默マク然ニヤム  
 148 | 6、毘ヒ尼ニ母モ 148 | 8、氣キ 148 | 8、  
 上シヤウ氣キ 148 | 8、下カ氣キ 148 | 8、莊シヤウ子シ 150  
 | 2、肉ニク者ジャ 152 | 5、莊シヤウ子シ 157 | 4、曲クワク礼レイ 162 |  
 3、莊シヤウ子シ 162 | 9、顏ケン氏シ家カ訓クン 165 | 2、  
 職シヤク員ケン 165 | 9、曲クワク礼レイ 167 | 9、戶コ子シ  
 170 | 3、顏ケン氏シ 171 | 1、戰セン國クワク策サツ 178 | 4、厨シュ子シ 182 |  
 3、顏ケン氏シ 183 | 2、顏ケン氏シ家カ訓クン 186 | 2、抱ハク朴キヤウ子シ 189  
 | 2、韋ワイ仲チュウ將シヤウ 191 | 1

内典関係の語彙が多いことが目を引くほか、外典関係であつても「莊子」「顔氏」といった書名にも呉音形が現れていることが分かる。

漢籍であっても、書物の名称には呉音形が出現することが

多かつたということは、築島裕（一九六九）などで指摘されていることであるが、しかし、全ての書名が呉音読されているわけではなく、漢音形の蓋然性の高い「爾ニ雅カ」124―4」をはじめ、中古音の体系に沿った声点が差されている「劉ミ子ミ95―4」「韓カ子ミ149―2」のような漢音読の書名があることも注意される。ただ、同じ文献が漢音・呉音の両様に読まれている例は原則として存在せず⑤、それぞれの書名については読み方が固定していたことの表れであろう。

## 2 漢音語の仮名音注について

前節で述べたように、世俗諺文には呉音系字音が含まれてはいるのだが、しかし大多数を占めるのは漢音語である。世俗諺文の漢音語の考察は従来手付かずだった分野でもあり、本節と次節とで世俗諺文における漢音語の特徴について検討してみたい。本節では仮名音注について考察するが、紙幅の都合もあるため、全用例については後掲の分韻表を参照願うこととし、ここでは主な用例についてのみ挙例する。

まず、m韻尾を「ムム」で、n韻尾を「ン」で表記する原則は、鎌倉時代には混乱が生じ始めたとされる。世俗諺文においては以下のような例外があるとはいえ、まだ使い分けの確度は高い。

▽ n韻尾を「ムム」表記した例：諺81―4、涓82―7、鬮シヨム118―7、昆ムム125―9、鬱ムム139―2、榮ムム155―7、顔ムム158―2、陳ムム160―3、展ムム161―4、晋ムム166―6、182―4、篆ムム185―7の一  
字二例⑥。原則通り「ン」表記になっているのは、七〇字一〇四例。

▽ m韻尾を「ン」表記した例：剣ムム172―3、艶ムム192―7の二例。「ムム」表記は一二字一四例。

しかし、世俗諺文では、鎌倉時代には混乱を生じつつあった「iヨウ（鍾・腫・用韻、蒸・拯・証韻）」と「eウ（蕭・篠・嘯韻、宵・小・笑韻）」の区別や、頭子音ア行・ワ行の区別はほぼ一貫して保たれているという特徴がある⑦。また、力行合拗音も相当程度保たれているなど、世俗諺文と同年代の漢音資料で、やはり僧侶の加点にかかる『大慈恩寺三蔵法師伝』鎌倉初期点⑧と比べても、より規範的な日本漢音を反映しているといえよう。

## 3 声点の検討

冒頭でも述べたように、世俗諺文における呉音語の声点と、それと他の呉音系字音資料との対応関係などについては、すでに高松（一九七八）による考察が行われている。本節では、

まだ研究が行われていない漢音語の声点について、考察を加えてみたい。

本資料の漢音語に差された声点は、平声・上声・去声・入声に加え、平声・入声に軽重の区別をした六声体系である。本資料に現れた声点と、中古音との対応表を作成すると、下段のようになる。

六声体系の日本漢音と中国中古音との対応関係については従来論じられてきたところであり、典型的には太線で囲った部分に分布するはずである。しかし、実際にはこれから外れたものが多く、単純に誤点ないし偶発的な異音形の混入とは片づけられないものも混じっている。

まず、平声・入声の軽重の混乱が進んでいるという特徴が挙げられる。平声・入声の軽重は一一世紀後半から混乱を生じ始め、前者は一四世紀初頭に、後者は一二世紀中頃には完全に混同したあと、室町時代には軽点を伴わない四声体系に移行するとされるが<sup>(9)</sup>、本資料はこの過渡期にあることが窺える。

もう一点注目されるのは、上声全濁字が高い比率で去声化している一方で、全濁音以外の上声字にも「去声化」している例が多く見られるという点である。このこと自体は高松(一九七八)によりすでに指摘されているところであるが、その後この現象についての本格的な考察は行われていないようである。

中古音 本資料	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	清濁	全清	次清	全濁	清濁	全清	次清	全濁	清濁	全清	次清	全濁	清濁
平声	144	22	106	99	2	1	3	3	11		3	2				
平声 輕	307	38	266	291	2	1	4	3	16		3	2				
平声 輕	46	10	11	9					3				1			
上声			2	2	48	14	10	28	3	2	4	4				
上声 輕			2	2	146	35	21	69	3	2	7	7				
去声	8		3	3	25	7	45	26	90	15	39	50	3		1	2
去声 輕	11		3	8	87	20	115	66	191	28	95	106	3		1	2
入声			1						1				49	9	27	24
入声 輕			1						1				90	14	40	42
入声				1	1			1	1			1	28	10	15	17
入声 輕				1	1			1	1			1	61	16	21	25

上段が異なり字数、下段が延べ字数。

一つの字に複数の声点が差されているものは、漢音形と思われる方を採用する。

上声・去声間の移動については、主に日本呉音の研究の中で扱われてきた。それによると、①一音節去声字は、上昇調を回避するために上声化した、②熟語において「去声・上声―去声」という「中低型」を回避するために、あとの去声字が上声化した、とされ、さらに同じ一音節去声字にあっても語頭に位置するものは上声化が遅れたことなどが指摘されている(10)。これらは基本的に呉音でのみ生じた変化であるが、漢音においても同様の変化が生じる場合があったことが報告されている(11)。

しかし、ここでは本来「上声」が差声されるべきところに「去声」が差されているのであり、従来指摘されてきた変化とは逆であるという特徴がある。また、音節数や語頭／語中といった環境などとも、特段の関連性は見出せないほか、「中低型回避」の観点からも解釈できない用例が多いことが目を引く。すなわち、犬(主馬) 72―7、内(主) 73―6、裨(主) 補(主) 81―9、鄭(主) 子(主) 98―3などの傍線字は、原則通りだと「上声」が差されるべき字であるにも関わらず、去声点が差されていることにより、本来生じないはずの「中低型」が出現しているような形になっている。一方で「去声字の上声化」が少ないことも考え合わせると、世俗諺文における上声・去声の移動は「漢字音の日本語化」という視点から捉えることは困難であるように思われる。

一つの可能性として、これら「去声化」の生じた字は日本

漢音で「去声」として定着していた字であり、それがたまたま世俗諺文に多く出現した、という図式も想定されるところである。実際、世俗諺文と同年代の漢籍訓点資料である金沢文庫本『群書治要』には、「寡」の去声例(八―二〇三、八―二四六など)や「美」の去声例(三―一八九)が出現し、「上声字の去声化」が皆無だったわけではない事情が窺えるのだが、しかしこれらはあくまでも例外であり、「全濁字以外の上声字は上声点が差される」のが大原則である。また、世俗諺文内部でも「子：上声差声例三九例、去声三四例」「主：上声三例、去声六例」というように揺れている字が存することも踏まえると、「去声で定着していた」とするのには躊躇が感じられる。高松(一九七八)で指摘されているように、僧侶による加点であることが関係してはならないかとも想定されるところであるが、より広範な調査が必要である上に、「世俗諺文の漢字音」という本稿の趣旨からも逸脱しかねないことから、ここではこのような問題点が存することを指摘するにとどめておき、子細な検討は今後の課題としたい。

さて、世俗諺文の声点には、圈点を二つ横に並べた「濁点」も使われている。多くは明母や疑母など、日本漢音において濁音として現れる字に打たれているのだが、それ以外の箇所には、呉音語の箇所でも、数は少ないが存在する。それらの中には、呉音語の箇所でも指摘したような「職員令」の「員」であったり、あるいは「踊」の三連点であったりと、誤写の可

能性の高いものも含まれているのだが、単純に誤写と割り切れない用例について、最後に触れておきたい。

まず、偶発的に呉音形が混入したと見られる例がある。負ミ罪ミ 100—6、似ミ我カ 112—5、奉ミ 120—7がその例だが、傍線を引いた「罪」「似」「奉」は上声全濁字であり、声調としては日本漢音の原則になかった「去声」が加えられつつも、清濁という面では呉音で期待される濁音形が現れた事情が読み取れる。

一方、連濁・連声濁と考えられる一群がある。閑カシ散チ 80—8、丹シ朱シ 91—4、渭水ミ 107—8、天シ性シ 108—6、榮シ啓シ期キ 152—9の各例である。もつとも、「丹朱」については、二行前では「丹シ朱シ 91—2」となっており、どちらかが誤写である可能性を捨てきれないし、鼻音韻尾を持たない「渭」のあとで濁点になっている「水」についても疑問が残る。ともあれ、呉音語では「莊子」「淮南子」などの連濁形が頻出することと比べると、漢音の連濁は際だって少ないことが指摘できる。

#### 4 まとめ

本稿で検証したことを箇条書きにすると、以下のようになる。

○仏教関係の語彙や一部の文献名は呉音で、それ以外は基本

的に漢音で読まれており、常識的見地からも首肯されることである。ただし、書名によつては漢音も使われている。

○漢音の仮名音注については、この時期に生じつつあった変化をあまり反映しておらず、より規範的な姿を保っている。

○漢音の声点は、軽重（とりわけ入声）に混乱が多く見られるほか、原則通りだと上声に加点されるべき所に去声が加点されている例が見られる。これは音声の見地からは説明できないほか、他の資料でもあまり見られない現象である。

○漢音形には、連濁形があまり見られない。ただし、清濁の認定自体にやや疑問があることにも留意する必要がある。

本稿では『世俗諺文』に考察の対象を絞り込んだため、他の文献との対照などは十分に行えなかった。僧侶によつて加点された漢音全般の性格や宗派による違い、あるいは博士家の文献との比較・対照など、残された課題は多いのだが、他日の考察を期したい。

#### 〔注〕

(1) 築島裕（一九六三）第五章、小林芳規（一九六七）第六章など。

さらに、小林芳規（一九八四）では、加点者が真言宗の僧侶である可能性にも言及している。

(2) なお、以下、用例の所在を表示するに当たっては、『天理図書館善本叢書・和書之部第五十七卷 平安詩文残篇』（八木書店、一九八四）におけるページ数と行数の順で示す。

(3) この「踊」には、圈点が三つ打たれているが、「濁点」とは認定しなかった。

(4) 仮名は別筆。

(5) 例外として、「墨子」と「戦国策」とがあり、まず前者は、「墨」の字の脇に別筆で「ホク也」と記入されている。後者は、142―8に「戦<sup>セシ</sup>国<sup>コク</sup>策<sup>サク</sup>」という用例が出現する。ただ、178―4の例は、「策」に「シヤク」の仮名があることから呉音形と認定したが、一方で「戦」には142―8と同じ「去声」の声点が差されている（広韻とも合致している）ことから、偶発的に呉音形が混入した可能性も存する。このように、両用例とも、「読み方に揺れがあった」例として扱うには、躊躇されるところである。

(6) なお器・粲は漢音だとそれぞれギン・サン、呉音でもゴン・サンが想定される字なので、疑問は存する。

(7) 例外と目される例として、「翁<sup>ウウ</sup>11―4」があり、この字は沼本克明（一九八二）第二章第三章第四節の原則によるとア行で出現する字で、実際長承本蒙求では「オウ」となっている。しかし、「翁」は図書寮本文鏡秘府論でもすでに「ラウ」となっており、世俗諺文より前の時代に、すでに混乱が生じていた例であると言える。

(8) 佐々木勇（二〇〇三）によった。

(9) 柏谷嘉弘（一九六五）、佐々木勇（一九九八）など。

(10) 沼本克明（一九八六）、佐々木勇（一九八七）など。

(11) 佐々木勇（一九八八）など。

(12) 時代の下の資料であるが、『玉塵抄』巻二四に「漕ノ水ハナ

ニトニコセトモニコラスノ涇ト云水ナニスレトモニゴルソ」という記述がある。これを連濁に関する記述であると考えると、「漕水」の「水」が連声濁を起ささない様が描かれていることになり、このことも「世俗諺文」での「濁点」に疑問符が付く一因である。

#### 参考文献

柏谷嘉弘（一九六五）『図書寮本文鏡秘府論の字音声点』（『国語学』六二）

小林芳規（一九六七）『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』（東京大学出版会）

——（一九七一）『中世片仮名文の国語史的研究』（『広島大学文学部紀要』特輯号三）

——（一九八四）『天理図書館善本叢書・和書之部第五十七巻平安詩文残篇』訓点解説（八木書店）

佐々木勇（一九八七）『呉音一音節去声字の上声化の過程』（『鎌倉時代語研究』一〇）

——（一九八八）『日本漢音に於ける声調変化——岩崎文庫本『蒙求』を中心に——』（『新大國語』一四）

——（一九九八）『日本漢音における軽声の消滅について——漢籍を資料として——』（『鎌倉時代語研究』二二）

——（二〇〇三）『大慈恩寺三蔵法師伝』鎌倉初期点における漢音形の日本語化——院政期点および『蒙求』字音点との比較を通して見る——』（『新大國語』二九）

高松政雄（一九七八）「観智院本「世俗諺文」の声点」『岐阜大学国語国文学』一三

築島 裕（一九六三）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（東京大学出版会）

——（一九六九）『平安時代語新論』（東京大学出版会）

西崎 亨（一九七二）「世俗諺文和訓索引」『訓点語と訓点資料』四八

沼本克明（一九八二）『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』（武蔵野書院）

——（一九八六）『日本漢字音の歴史』（東京堂出版）

（いしやま・ゆうじ 大学院人文社会系研究科 博士課程二年）



## (付録) 観智院本『世俗諺文』字音点分韻表

(凡例)

本表は、観智院本『世俗諺文』に出現する漢音の仮名音注について、分韻表の形に整理したものである(仮名音注がなく声点のみが差声されている字に関しては、紙幅の都合から割愛した)。吳音形については本文中に列挙したので、そちらを参照されたい。

明らかに誤記と見られる例については、適宜割愛した。ただし、他の資料に例が見られるなど、慣用音として確立していた形跡のある例については掲載した。また、「広韻」に記載のない字については、本表からは省いた。

本分韻表では、縦軸に声母を、横軸に韻母を配置しており、声母については基本的に『中国文化叢書』第一卷(大修館書店、一九六七)一三〇ページによっているが、本表では唇音については軽重を区別したほか、喉音清濁三等についても「干母」とした。また、具体的な推定音価については、諸説あることにより本表では掲げていない。

韻目の配列は「韻鏡」により、開合・直拗を区別し、括弧内に記した。また、重紐に関わるものについては、甲類・乙類を区別したほか、声母についても、必要に応じ「ㄷ 3」のように、等位を半角字で示している。

挙例に当たっては、字、仮名、(声点)、所在の順とした。

漢字・片仮名の字体は、原則として現行通用の書体に直してある。また所在の表示は天理図書館善本叢書『平安詩文残篇』により、ページ数―行数の順である。声点については、括弧内に英字で示し、それぞれ a…平声、b…平声軽、c…上声、d…去声、e…入声軽、f…入声を表す。なお小文字(a・b…)で示したのが単点で、大文字(A・B…)で示したのが複点である。

仮名音注・声点ともに全く同様の例が複数見られる場合は、最初の例のみを掲げ、以下は/のあとに続ける形で表示した。また、仮名が虫損などで判読できない場合などは、当該部分に「x」を記した。

1) 通深

	平声		去声		入声	
	東(直)	董(直)	送(直)	屋(直)		
端		董ㄉㄨㄥˇ 186-8			董ㄉㄨㄥˋ 121-3/121-4	
定					董ㄉㄨㄥˋ 155-6(**)	
見	公ㄍㄨㄥ(ㄅ) 161-6		貢ㄍㄨㄥˋ(ㄉ) 163-6/163-7			
溪		孔ㄎㄨㄥ(ㄛ) 80-6/101-7/158-4/158-5	貢ㄍㄨㄥˋ 158-2			
影	鏡ㄐㄩㄥˋ 114-4					
來	東(物)				角ㄐㄨㄥˋ(ㄛ) 175-8	屋(物)
奉	滂ㄆㄤ(ㄆ) 154-4				服ㄈㄨ(ㄛ) 183-8	
群	群ㄑㄩㄥ(ㄆ) 170-8					
昌	充ㄔㄨㄥ(ㄆ) 193-3				叔ㄊㄨ(ㄛ) 168-8	105-9/127-7/153-2/180-9(**)
書						
匣	鴻ㄏㄨㄥ(ㄆ) 192-3					肉ㄖㄨ(ㄉ) 113-4
日	戎ㄖㄨㄥ(ㄉ) 95-2					

(\*) 「独歩」の促音形と見られる。(\*\*) 仮名は別筆。

	冬	宋	沃
並			僕ㄅㄨ(ㄛ) 81-2/95-1
泥	農ㄋㄨㄥ(ㄆ) 72-2		
精		祭ㄐㄞ(ㄆ) 95-1	
匣			韻ㄩㄥ(ㄉ) 144-7
鍾			
腫			
用			
燭			

群			肩ヲ (D) 166-1 隅ヲ (F) 101-3
徒		徒ヲ (a) 74-2 徒ヲ (d) 126-3	
心邪影	豎牛ヲ (d) 191-7 豎牛ヲ 192-2/192-7	踊ヲ (c) 190-1	栗ヲ (f) 149-9
羊		勇ヲ (c) 107-4/142-2 勇ヲ (d) 159-7 踊ヲ 104-8	

2) 江撰

知			豎ヲ (c) 78-6/184-7
疑			嫌ヲ (E) 193-5
影			摺ヲ 189-4
匣		卷ヲ (d) 81-5	

3) 止撰

	支 (開)	紙 (開)	寔 (開)	
鞘3	碑 E 146-3/146-3			
見	奇ヲ (a) 78-2/134-3/134-4			
溪3		綺ヲ (d) 175-8	義ヲ (D) 164-1	
疑	宜ヲ (A) 143-3		誼ヲ (D) 140-1	
書		弛ヲ (d) 96-7 弛ヲ 96-8 氏ヲ (b) 165-2 氏ヲ 93-4/171-1		

清	糞 <small>(a)</small> 192-8		劑 <small>(D)</small> 80-4/163-6
睡	尿 <small>(a)</small> 164-5	糞 <small>(D)</small> 124-4/145-3	
日	支 (合)	紙 (合)	糞 (合)
見4	糞 <small>(a)</small> 185-2		偽 <small>(D)</small> 158-5
疑3			

	脂 (開)	旨 (開)	至 (開)
替4		比 <small>(d)</small> 95-4	
明		美 <small>(D)</small> 164-4	
娘	尼 <small>(A)</small> 150-7		
見	尼 <small>(f)</small> 127-8		膿 <small>(d)</small> 79-7
漂3			器 <small>(d)</small> 72-2/174-1
漂4			棄 <small>(d)</small> 113-2
生	師 <small>(f)</small> 78-2	旨 <small>(d)</small> 82-2	
葦			
毒	尸 <small>(c)</small> 170-2		
徒	茨 <small>(a)</small> 71-8/95-5		
心		死 <small>(d)</small> 160-5	
羊	夷 <small>(a)</small> 149-2/168-8		
見4	脂 (合)		至 (合)
生			季 <small>(d)</small> 157-5/161-4/175-8
邪			季 <small>(f)</small> 169-5
于	帷 <small>(a)</small> 78-8/186-7		帥 <small>(d)</small> 106-6
			遂 <small>(d)</small> 137-1

澄	持 <small>(f)</small> 112-2	之	止	志
---	----------------------------	---	---	---

見3	基子(a) 189-6 笑子(a) 74-1/124-7		記子(a) 89-4	
群	翔子(a) 152-9 麒子(a) 79-7			
英生		史子 80-4/163-7	重子(c) 79-8	
筆	芝子(a) 165-1/190-5		志子(d) 156-4	
書			待子 120-9	
精		子子(c) 96-4/138-3/164-8 子子(d) 178-4		
徒	慈子(a) 115-7/124-1/124-2			
心	藤子(a) 127-4			
邪	祥子(a) 162-1/176-3			
来	蘆子 118-9	李子(d) 83-6/98-6/156-2 李子 98-6 里子(d) 175-8 里子 175-8		
日			顔子(D) 72-5/100-8	
	微(開)			
群	折子(a) 115-7 微(合)	尾(合)	末(合)	
微見	微子(A) 82-2	蟻子(d) 86-8	魏子牛(d) 166-8	
疑影			尉子 115-8	
于	韋子(a) (a) 139-1/141-3/181-5/190-6			

4) 選擇

	魚	語	御
見3			楓 <sup>3</sup> (c) 102-2
疑3			御 <sup>3</sup> (C) 120-9
初		楚 <sup>3</sup> ( d ) 113-9/118-9/137-8/169-5	
崇	組 <sup>3</sup> (d) 180-9		
草	語 <sup>3</sup> (a) 151-5		
書	書 <sup>3</sup> (b) 182-4	泰 <sup>3</sup> 70-1	
心	舒 <sup>3</sup> (a) 186-8		
邪	膏 <sup>3</sup> (a) 94-2		
晚		叙 <sup>3</sup> (d) 79-7	
干		許 <sup>3</sup> (c) 175-5	
羊	余 <sup>3</sup> (a) 109-2	許 <sup>3</sup> (d) 118-9	香 <sup>3</sup> (d) 138-3
采		呂 <sup>3</sup> (d) 181-5	撥 <sup>3</sup> (c) 166-6/167-1
日	如 <sup>3</sup> (A) 80-7	按 <sup>3</sup> (C) 164-1	預 <sup>3</sup> (d) 98-4

	模	姥	暮
幫	輔 <sup>3</sup> (a) 159-2	輔 <sup>3</sup> (c) 124-9	布 <sup>3</sup> (d) 169-5
滂		溥 <sup>3</sup> (c) 92-2/92-3	步 <sup>3</sup> (c) 76-8/156-5
並	蒲 <sup>3</sup> (a) 112-2		步 <sup>3</sup> (d) 155-6
			哺 <sup>3</sup> (c) 94-3
			哺 <sup>3</sup> (d) 73-9/123-9
端	都 <sup>3</sup> (a) 192-3		哺 <sup>3</sup> 124-1

透		吐卜(c) 189-4	
泥		弩卜(D) 144-2	
見	姑コ(a) 174-8	古コ(d) 80-4	固コ(c) 179-7
疑	吳コ(A) 189-2		錮コ(d) 124-9
精		祖コ(c) 155-8	
心	蕪コ(a) 177-6		
匣	孤コ(a) 115-9		
來	盧コ(a) 137-8	魯コ(d) 97-1/127-6/158-5	
	董コ(a) 112-2		
	虞	藥	遇
非	夫7(a) 72-9	符7(c) 79-8	傅7(d) 179-6/182-8
	夫7(b) 106-4	甫7(c) 134-3	
奉		父7(c) 110-5	
		鏗7(a) 149-9	
		輔7(c) 107-8	
		侮7(D) 125-6	
微		武7(D) 153-3	
見	駒コ(a) 76-1		
群	句コ(a) 121-9		
疑	虞コ(a) 93-1		
	虞コ(A) 180-7		
	虞コ 181-1		數7 78-2
生			
奉	朱コ(a) 113-8		
精	陟コ(a) 127-6		
影			姬コ(a) 112-3
曉		陟コ(a) 112-3	
干	干コ(a) 70-1	高コ(d) 153-3/163-6/163-7	
羊		庚コ(c) 182-6/182-6	

5) 彙探

	哈	海	代	
定	台 <sup>ナ</sup> (b)115-1		載 <sup>ナ</sup> (d)99-5	
精			載 <sup>ナ</sup> 112-4	
清		采 <sup>ナ</sup> (c)95-6	葉 <sup>ナ</sup> (c)152-2	
從	才 <sup>ナ</sup> (a)136-8			
影	哀 <sup>ナ</sup> (a)180-4			
匣	孩 <sup>ナ</sup> (a)135-7			
來	萊 <sup>ナ</sup> (a)97-1/106-1			

	灰	賄		
明	故 <sup>ナ</sup> (a)133-2			
疑	灰 <sup>ナ</sup> (a)160-5	隗 <sup>ナ</sup> (c)142-8		
疑	回 <sup>ナ</sup> ナナナ(a)			
匣	97-2/154-9/155-1/158-2			
來	雷 <sup>ナ</sup> (a)164-1			

	皆 (開)		怪 (開)	
見	倍 <sup>ナ</sup> (a)74-3		發 <sup>ナ</sup> (d)160-1	
生				
匣	皆 (合)			
	懷 <sup>ナ</sup> (a)114-7			
	淮 <sup>ナ</sup> (a)173-8			

			祭 (開)	
章			制 <sup>ナ</sup> (d)168-4	
			祭 (合)	



子		衛エイ(d) 111-3/160-1/160-1/166-1/190-1 衛エイ160-2
---	--	---

透	齊(開)	齊(開)	齊(開)	
定		体ヲ(C)192-5 弟ヲ(D)125-9	繁ヲ(D)185-7 計ヲ(D)120-5 葡ヲ(D)121-8	
見				
溪		啓ヲ(C)152-9(*)		
從		齊ヲ(a)107-2 齊ヲ(b)160-3		
心			細ヲ(D)164-4	
匣		委ヲ(b)115-7		
來		礼ヲ(c)83-5/143-3/162-9 礼ヲ71-2		
見	齊(合)			
		闕ヲ(a)110-6		

(\*)人名「榮啓期」の連濁例と思われる。

清			蔡ヲ(d) 113-2/113-3/126-2/160-3/191-7 /192-2/192-6/192-7	
---	--	--	--	--

	佳(開)	蟹(開)		
溪				
匣	街ヲ81-5	解ヲ(c)115-9	卦(合)	

溪		卦ㄉ (D) 185-7	
---	--	--------------	--

6) 臻深

匣	很	很ㄉ (D) 125-6	
見	魂		沒 (合)
精			卒ㄩㄥ (e) 144-2
心			送ㄩㄥ (D) 189-3
影			透ㄩㄥ (b) 151-6
曉			忽ㄩㄥ 81-1

	臻		櫛
生	號ㄩㄥ (A) 189-6		虱ㄩㄥ (e) 86-8
	號ㄩㄥ (a) 189-7		

	真	軫	震	質
幫3	彬ㄩㄥ (a) 185-8			
幫4	浜ㄩㄥ (a) 92-3		濱ㄩㄥ (a) 139-2/139-3	
	浜ㄩㄥ (b) 176-3			
並4	並ㄩㄥ 108-2			
明3		批ㄩㄥ (D) 74-4/128-3		
邊	陳ㄩㄥ (a) 160-3	敏ㄩㄥ (C) 187-3		
見4				吉ㄩㄥ (e) 115-1
				吉ㄩㄥ 115-1
疑	聞ㄩㄥ (A) 80-7			
	聞ㄩㄥ 118-7			
	雷ㄩㄥ 118-7/118-8			

草	申ツヨ(b) 83-6		麗ツヨ(d) 106-1/106-2	矢ツヨ(f) 161-2
書			晋ツヨ(d) 166-6/182-4	
精			晋ツヨ(d) 83-6/115-9/171-1	
清				漆ツヨ(f) 163-9
影3				乙ツヨ(e) 118-6
羊				滋ツヨ(f) 114-2/152-2
				逸ツヨ(e) 192-8
				俣ツヨ 93-2
日	麟ツヨ(a) 180-3			

書	輝	準	穂	
常	輝ツヨ(a) 144-3		輝ツヨ(d) 91-3/153-2	
精			慶ツヨ(d) 96-5	
心	輝ツヨ(a) 115-7/181-6			
羊		尹ツヨ(c) 79-9/95-1/134-3		

影	欣	隠		迄
眺	麗ツヨ(a) 118-6	隠ツヨ(c) 183-1/191-7		迄ツヨ(c) 127-7

	文		問	
見	麗ツヨ(a) 149-3(*)			
群	群ツヨ(a) 178-6			
眺			副ツヨキツヨ(d) 121-8/122-2	

(\*) 仮名は別筆。

7) 山探	山 (開)	産 (開)	
-------	-------	-------	--

見 匣	閑カ(α) 80-8	箭カ(ε) 192-7	
--------	------------	-------------	--

見 影		願 (開)	月 (開)
	元 (合)	建ヱ(δ) 96-4	謁ヱ(γ) 159-3
非 疑 影 子		阮 (合)	月 (合)
		反(ε) 73-9	
		阮ヱ(γ)(C) 172-4	
		宛ヱ(ε) 102-8/105-5	
		遠ヱ(ε) 98-6	越ヱ(ε) 192-8
	園ヱ(α) 175-8		
	猿ヱ(α) 170-8		

羊		獮 (甲開)	
	仙 (甲合)	衍ヱ(ε) 154-4	
羊	沿ヱ(α) 96-8		
	鉛ヱ(α) 145-5		
	鉛ヱ(β) 75-7		

端 定 見	寒	旱	翰	曷
	丹ヱ(α) 91-2 (*) 91-4	颯ヱ(δ) 190-6	旦ヱ(δ) 80-1	坦ヱ(ε) 190-1
	奸カ(α) 100-7			割カ(γ)(ε) 75-7/145-5
溪 精 清 心		侃カ(δ) 80-7	攀ヱ(γ) 175-8 桑ヱ(α)(δ) 155-7 散ヱ(δ)(D) 80-8 (**)	憲カ(δ) 151-5 憲カ(γ) 127-3 薩ヱ(ε)(ε) 82-4/95-1/117-9

匣	韓カヨ (a) 107-2/137-4/149-2/166-8		悍カヨ (d) 159-7	
采	圃カヨ (a) 165-1			

(\*) 「舟」字に作る。(\*\*) 「閑散(かざん)」の連濁例と見られる。

	桓		換	未
端	端カヨ (a) 79-9			
溪				關カヨ (c) 127-1
清			養カヨ (d) 139-2	
匣	完カヨ (a) 145-3 桓カヨ (a) 149-2			

	刪 (開)		隊 (開)	
疑	顔カハ (A) 158-2			
影	顔カヨ (A) 97-1/154-9/188-1		晏カヨ (d) 102-2	
	刪 (合)		潛 (合)	
幫	班カヨ 145-6			
明			黠カハ (A) 139-2	
見	聞カヨ (a) 169-8			
匣		院カヨ (d) 111-5/111-6		

	仙 (乙開)		獮 (乙開)		薛 (乙開)
知		展カハ (c) 161-4		哲カヨ (c) 135-8	
群	虔カヨ (a・D) 183-8		諫カハ (D) 81-4	哲カヨ 74-8	禪カヨ 95-4
疑			彦カヨ (D) 178-6		
章			戰カヨ (d) 102-6/142-8		
	仙 (乙合)		獮 (乙合)		

透	椽子ノ(a)95-6	篆子A(a)185-7	伝子ノ180-9	
昌	穿子(a)124-9	篆子ノ(d)190-3/192-6		

	先(開)	銃(開)	篋(開)	屑(開)
滂			片ヰ(d)189-8	
溪	篋ヰ(a)91-6			契ヰ(f)127-1
精	篋ヰ(ア)(b) 101-4/111-7/112-2/147-2			
	篋ヰx(b)92-4			
	篋ヰ131-4			切ヰ(f)184-7
清				切ヰ(f)78-6
匣	賢ヰ(a)136-4	眼ヰ(d)111-5/111-6		韻ヰ(f)190-1
	先(合)			
見	涓ヰA(a)82-7			
影	涓ヰ(a)188-1			
	涓ヰ(b)154-9			
匣	玄ヰエヰ(a)183-7			

8) 郊撰

	塞	皓	号	
並		抱ヰ81-6	暴ヰ(d)157-6	
明			卷ヰ76-1	
端	刀ヰ(a)75-7			
定	陶ヰ(a)113-8/138-3			
疑	董ヰ(a)82-7(*)			
精	精ヰ(a)74-4			
從	曹ヰ(a)96-4/104-8/155-7			

曹 <small>ソウ</small> <small>ソウ</small> (b) 146-3	皓 <small>コウ</small> (d) 77-9/175-7/191-2 老 <small>ロウ</small> 144-5(**)	号 <small>ゴウ</small> (d) 123-4/123-5	
---	---	-------------------------------------	--

(\*) 「入声腔」の位置にも圈点があるが、不番。(\*\*) 仮名は別筆。

省	巧	効	
翫 <small>ケン</small> (a) 141-7		豹 <small>ヒョウ</small> (d) 75-1/138-2	
季 <small>キ</small> (A) 71-8/95-5			
見 <small>ミ</small> (a) 163-9	巧 <small>コウ</small> (c) 158-5	教 <small>コウ</small> 179-6	

宵(乙)	小(乙)		
澄 <small>テイ</small> 112-4	趙 <small>テウ</small> (d) 120-3/166-8 馨 <small>シン</small> (d) 172-4		
影 <small>エイ</small> (a) 118-9/130-3		笑(甲)	
並 <small>テイ</small> (a) 157-9/192-7			
心 <small>シン</small> 69-2		肖 <small>シウ</small> 136-4	

蕭	嘯		
端 <small>タン</small>		釣 <small>テウ</small> 107-6	
疑 <small>テイ</small>	羌 <small>キヤウ</small> (A) 90-6/91-2/175-5		
心 <small>シン</small>	羌 <small>キヤウ</small> (A) 71-5 蕭 <small>シウ</small> (a) 98-6		

9) 果撰

歌	祭		
溪 <small>キ</small> 156-1	可 <small>カ</small> (d) 116-1		
疑 <small>イ</small> 146-3	我 <small>ガ</small> (D) 112-5		

清	聲 <sup>レ</sup> (a)78-6/184-7			
	戈	果		
明	聲 <sup>レ</sup> (A)78-6/184-7	聲 <sup>レ</sup> (c)112-1		
見	和 <sup>レ</sup> (a)129-3			

1 0) 仮接

	床 (直開)	馬 (直開)	禱 (直開)	
射	巴 <sup>レ</sup> (a・c)103-4		類 <sup>レ</sup> 107-8	
明	麻 <sup>レ</sup> (A)174-8		兼 <sup>レ</sup> 166-1	
見	牙 <sup>レ</sup> (a)167-4	實 <sup>レ</sup> (d)140-1		
疑	牙 <sup>レ</sup> (A)167-5	雅 <sup>レ</sup> (C)124-4		
影		下 <sup>レ</sup> (d)157-5	亞 <sup>レ</sup> (d)192-4	
匣		夏 <sup>レ</sup> (d)150-5		
	床 (拗開)	馬 (拗開)	禱 (拗開)	
審			敬 <sup>レ</sup> (d)169-6	
邪		洽 <sup>レ</sup> (d)124-8	謝 <sup>レ</sup> (d)182-8	
羊		野 <sup>レ</sup> (d)127-5		
		野 <sup>レ</sup> 112-4		
		馬 (合)		
見		塞 <sup>レ</sup> (d)78-5/153-5		

1 1) 宕接

	唐 (開)	蕭 (開)	鐘 (開)	
端	端 <sup>レ</sup> (a)72-9/106-8			
透	透 <sup>レ</sup> (b)153-3			



定		藩 <sup>ナ</sup> (D) 192-7		藩 <sup>ナ</sup> (E) 77-4/169-4
泥				
溪	糠 <sup>ナ</sup> (a) 128-6			藩 <sup>ナ</sup> (E) 105-6
	糠 <sup>ナ</sup> 74-4			藩 <sup>ナ</sup> 105-7
疑				
漣	蒼 <sup>ナ</sup> (b) 190-1			鑿 <sup>ナ</sup> (c) 124-9
徒				鑿 <sup>ナ</sup> (f) 98-7
米	蠅 <sup>ナ</sup> (a) 72-9/106-8			維 <sup>ナ</sup> (f) 176-1
				鑿(合)
見				郭 <sup>ナ</sup> (f) 164-4
曉				霍 <sup>ナ</sup> (e) 118-3/118-6/119-3

	陽(開)	養(開)	漾(開)	葉(開)
澄		丈 <sup>ナ</sup> (d) 80-2		
庄	莊 <sup>ナ</sup> (a) 139-1		壯 <sup>ナ</sup> (d) 156-4	
	莊 <sup>ナ</sup> (b) 139-3/161-6			
章	莊 <sup>ナ</sup> 107-2			
章	章 <sup>ナ</sup> (a) 177-6			
章	商 <sup>ナ</sup> (a) 175-7			
常	豐 <sup>ナ</sup> (b) 116-4			
心	養 <sup>ナ</sup> ナリ(a)			
邪	127-8/166-8/166-9/178-4	象 <sup>ナ</sup> (d) 126-2/185-7		
曉			向 <sup>ナ</sup> (d) 170-6	
	鄉 <sup>ナ</sup> (b) 127-6			
	鄉 <sup>ナ</sup> 173-1			
	香 <sup>ナ</sup> (a) 72-5			
	香 <sup>ナ</sup> 100-8			
羊	洋 <sup>ナ</sup> 167-6			羶 <sup>ナ</sup> 104-8

日	養 (合)	藤ノ竹 (C) 166-6/167-1	
	況ノ半竹 (C) 81-1	澁 (合)	
晝		況ノ半竹 (B) 99-7	

1.2) 梗接

	度 (開直)	梗 (開直)	敬 (開直)	陌 (開直)
精				伯ノ竹 (D) 134-4 伯ノ竹 (D) 190-5(*)
並	彭ノ竹 (a) 99-7			
明	生ノ竹 (a) 75-2	猛ノ竹 (d) 170-1	孟ノ竹 (d) 116-4	
生	生ノ竹 (b) 83-6/139-6			
	度 (開拗)	梗 (開拗)		陌 (開拗)
精		丙ノ竹 (C) 115-1/115-1		
見	荆ノ竹 (a) 156-1	乘ノ竹 (C) 105-9		敬ノ竹 (C) 72-2/96-9
溪	卿ノ竹 (a) (a) 146-4/149-2/181-6/188-7			郟ノ竹 (D) 189-6
影	莖ノ竹 (a) 190-5			

(\*) 「ㄣ」の誤写か

	清 (甲開)	靜 (甲開)	勁 (甲開)	昔 (甲開)
滂			聰ノ竹 (d) 175-5	
明	名ノ竹 (a) 89-1/123-4		勁ノ竹 (d) 144-2	騰ノ竹 (D) 101-3
見				繩ノ竹 (C) 178-6
精		靖ノ竹 (C) 116-4		益ノ竹 (D) 163-6
從	嬰ノ竹 (a) 135-7			
影	嬰ノ竹 (b) 116-5 嬰ノ竹 117-8			

羊	縷 <sup>レ</sup> (b) 176-2 縷 <sup>レ</sup> (a) 136-2 縷 <sup>レ</sup> (c) 112-1			易 <sup>レ</sup> (f) 192-7
群	清 (甲合) 瓊 <sup>レ</sup> (a) 119-1			

見初		耿 (開) 耿 <sup>レ</sup> (c) 99-7		莖 <sup>レ</sup> (f) 96-8 莖 <sup>レ</sup> (e) 99-8/142-8 莖 <sup>レ</sup> (e) 120-5
匣				麥 (合) 獲 <sup>レ</sup> (e) 180-3 獲 <sup>レ</sup> (f) 78-3

澄	清 (乙)		勁 (乙) 鄭 <sup>レ</sup> (d) 98-3/119-2/129-3	昔 (乙) 陌 <sup>レ</sup> (e) 157-5 陌 <sup>レ</sup> (f) 157-9/158-5/159-9
審	征 <sup>レ</sup> (a) 149-3		聖 <sup>レ</sup> 91-3	
來			令 <sup>レ</sup> (d) 89-1/106-1	

明	青 (開) 冥 <sup>レ</sup> (a) 112-2 緄 <sup>レ</sup> (a) 112-1/112-1			錫 (開) 翌 <sup>レ</sup> (e) 82-4 威 <sup>レ</sup> 120-3 團 <sup>レ</sup> (e) 125-6
定				
清	青 <sup>レ</sup> (b) 152-3			
曉				
來	始 <sup>レ</sup> (a) 112-1/112-1			

1.3) 流標

	侯	厚	候	
並		部抄 (d) 164-4		
明		母抄 (c) 110-5		
見	線抄 (a) 93-4			
疑		偶抄 (c) 179-3		
心		聖抄 (c) 69-5		
匣	侯抄 (a) 88-9/115-9/120-5/120-5 侯抄 (b) 164-4	後抄 (d) 139-6 后抄 (d) 120-4		
來			陋抄 (d) 184-5	

	尤	有	宥	
非		不7 (d) 181-5 不7 136-4		
奉		婦7 (d) 73-8/121-5/126-4	屋抄 (d) 159-2	
知		耐抄 (d) 105-6		
澄		耐抄 95-4/131-1(*)		
溪	丘キリ (b) 157-8/158-4/158-5/158-9/159-5			
群	丘抄 159-4 求抄 (a) 136-7	白抄 (d) 173-7		
莊	裘抄 (a) 74-1/124-7 郷又 (a) 126-1/163-3			
常	鍾抄 (a) 126-2	友抄 (d) 119-8		
干		友抄 119-7		
來	劉リリ (a) 143-1/164-8/172-3/173-8/183-6	柳抄 (c) 157-5		

留字(a)114-4/120-5  
 (\*)上書きして「チチ」に訂正。

函	休字(a)117-4		

1 4) 深撰

見	優	寝	沁	緋
初	参字(a)122-8/124-6			綴字(c)164-4
崇	涛字(a)(a)82-7			
書	深字A176-1	沈字(a)(c)95-1		昌字(c)93-7/123-5/127-6
影3				昌字106-1
影4	敬字A(a)183-6			揮字80-6
睡	淫字A(a)111-3			
字				
日			任字(D)136-7/178-6	

1 5) 咸撰

匣	覃	合
函字A(a)80-2		合字(f)127-5

常	塩(甲)	琰(甲)	鹽(甲)	葉(乙)
				涉字(c)144-8
精				葉(甲)
字	養字A(a)79-8	絳字(c)172-3	黠字(a)192-7	接字(f)114-6

添			
---	--	--	--

溪	謙キハ(a) 80-2		
---	-------------	--	--

匣			蘭カ(D) 137-8
---	--	--	-------------

疑		儼	
		儼カA(c) 167-9	

奉		范	
		范ハ(D) 166-6	

16) 曾授

明	登(開)		徳(開)
定	騰キ(a) 119-2		墨カ(B) 123-5 懸カ 105-6
匣	恒キ(a) 190-1		克キ(c) 83-6/153-5 恒キ 96-5(*)
見	登(合)		徳(合)
匣	弘キ(a) 128-7		国キ(c) 142-8 懸キ(c) 105-9/105-9

(\*) 横線を書き直したものと見られ、「キ」に似た字体になっている。

見	蒸	証	職(開)
群	疑キヲ(a) 102-6		疑キヲ(c) 192-7
疑			疑キヲ(E) 140-3
書			節キヲ(D) 192-3 疑キヲ 160-5

精	子	蠟半引(a) 76-4/152-3		孕引(d) 114-7	搜引 70-1
---	---	-------------------	--	-------------	---------